てっぺんの葉っぱ

自分の色を奏でるために

3年　Y・Kさん

ぼくは「マチ」と同じ、小学三年生で、「考えることが苦手」だ。ただ、マチとはちがうのは、「考えるのが苦手」だからこそ、あまり大たんな行動をせず、けっか的に「失敗」せずにすんでいるところだ。むしろ、マチは考えるのが苦手といいつつ、いつも考えようとしている。相手の事を考えるあまり、何も言えなくなっているのではないか。

ぼくが通っていた幼稚園には「表現の集い」という発表会があった。「発表会」といわないのは、練習したことを発表するのではなく、その場で「自由に表現する」からだ。しかし、ぼくは「自由に表現する」ことの方がむずかしいと感じていた。自由に表現するためにはそのつど考えなければならない。小学校に進学しても、考えた事を「表現」する大切さをいつも考えさせられている。先生は、考えて表現するためには「自分で自分の心を動かす」ことが大事だとおっしゃっている。マチも、物語の後半では、だれかに言われて行動したり、言葉で表現するのではなく、自分で自分の心を動かして、考えを表現できるようになったのだと思う。

魔女ババがくれた「てっぺんの葉っぱ」は自分で自分の心を動かすきっかけとなるもので、それが本当なのかどうかが問題ではないのではないか。特別ではない、「ただの葉っぱ」でも、自分の心を動かすきっかけになれば意味がある。ぼくは合唱団で『メリー・ポピンズ』の「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」を歌った時、その言葉も本当にはないものだけれど、困った時に自分の心を動かす切り札になると思った。

魔女ババのむすめさんの草木ぞめの話は、志村ふくみさんと娘の洋子さんの「色を奏でいのちを紡ぐ」話ににている。花びらから色水を作りそめるのではなく、木の枝を煮出すとためこんだ花の色が表れる。小学三年生のマチもぼくも、今、枝をのばして自分の色をたくわえ表現する時を心「待ち」にしている。